

人物紹介

勤王の志士 青木猛比古

佐伯市柏江に『勤王志士青木猛比古之碑』と彫られた碑が建てられている。佐伯史談にもたびたび紹介される人物である。

青木猛比古は、天保二年（一八三二）堅田郷柏江村の農家に生まれた。父を早くに失い母の手一つで妹二人と共に



に暮らしていた。七才の時、下野村の海福寺の小僧となり修行する。嘉永六年（一八五三）二十二才の時海福寺を出奔する。

その時に、次のような漢詩を残している。

元是	神州	清潔	清民
誤為	仏徒	説風	塵塵
我今	廢	仏	休恨
元是	神州	清潔	潔民

意味は「人間という者は岐路に迷いては大道が目にかからず井戸の底にいては天の広さを知らないもの

だ。思うに仏は、夷狄の法である。釈迦何者ぞ、畢竟唯是れ蕃神に過ぎない。然るに自分は神州に生まれ、神州の米を喰う日本男児にありながら夷狄の法を信じ、蕃神に仕えるとは何たる意気地なしであろうか。殊に今や天下の形勢を察するに内外多事、上下人心洶々として、皇国の前途、実に暗澹たるの時ではないか、宜しく還俗して天下を闊歩し、諸国勤王の志士を訪ひ、大に同志を糾合して、皇国の為に尽くすべきではないか。」とある。

海福寺を出た猛比古は大阪中寺町に住む叔父、青木甚平の弟萬冥が住職をしている法雲寺に行き滞在する。

ここで京都神祇伯の白川資訓すけのりに出逢い共に行動する。

白川資訓は、天保十二年生まれ十歳年下の貴族である。

白川家（伯家）は、公卿百三十七家の一つで家禄は百石

白川流神道しんどうの家元である。京の堂上家どうじょうけでは半家はんけと呼ばれる最下層の貴族である。猛比古はこの白川資訓の命によ

り豊前・豊後・筑前・筑後・周防・長門を舞台に勤王の志士として活動する。

嘉永七年（一八五四）日米和親条約調印、

十二月安政と改元。佐伯藩では海防のため白濁で弾薬造りがはじまった。弾薬作りの途中で工場が爆発する事件もあった。

安政二年（一八五五）大砲・小砲を造る為寺の梵鐘を差出すふれ触が幕府から出され末寺の梵鐘が抛出された。

安政三年（一八五六）龍護寺りゅうごで英国式訓練が始まり、杉谷に御船手射場いば、下野村に英国式訓練場が増設され藩士・足輕の訓練が行われた。

安政四年（一八五七）西洋流砲術訓練が江戸下屋敷で行われている。各藩が攘夷或いは開国、勤王・佐幕の旗印を次第に鮮明にしていた。

佐伯藩では、まだどちらの立場をとるか明確でなく、幕

府からの要請があればそれに従って行動していた。

猛比古はこの間、京都・豊後間を往復し勤王の志士を糾合する任務に就いていた。時代は文久と改元される。

文久二年（一八六二）佐伯藩では女島沖洲に砲台をつくり、上久部で大砲の铸造試射に取り組んだ。

佐伯藩の大砲は、はじめ陶器の破片と鍋鉄なべてつで造られた物だったので一発の試射で壊れてしまう。後、大阪にて技術を学ばせ銅製の砲を作ることになった。

この頃、大神氏の一族である賀来惟舒このよのぶ（惟熊これくまの四男）が佐伯藩に招かれ二十二門の大砲を造っている。

ではこの頃、猛比古はどうしていたのだろうか。

文久三年（一八六三）三月、薩摩藩主島津久光が京に上り、自藩の過激派を討つという寺田屋事件が発生した。この事が原因で、岡藩の勤王の志士小河一敏が藩命により蟄居きよきん謹慎させられる。猛比古は小河一敏と行動を共にしていたと考えられている。

この年に柏江茂八郎の名で郷里に送った手紙に有栖川宮あすかより錦繡きんしゅうの陣羽織一卷を送られた事などが書かれていた。同年八月十八日京都で長州と会津・薩摩との間で政変（八月十八日の政変）が起こり、長州派の公卿七名が京

を追われ長州三田尻に追放された。いわゆる「七卿落ち」である。七卿とは三條実美、三條西季知、東久世通禎、壬生基修、四条隆謨、錦小路頼徳、沢宣嘉の七名である。この「七卿落ち」に白川資訓の命により猛比古は護衛として参加している。この後、七卿は太宰府に移されるがこの時も護衛として猛比古は参加している。

元治元年（一八六四）白川資訓の家臣となり、神祇御用という名目で豊後直入・宇佐近郊に下り、長州藩復活の爲の尊皇攘夷者の結束を固めようとする。

慶應元年（一八六五）奥並継の紹介で宇佐、時枝重明氏のもとに行き尊皇攘夷を説いている。その時の話が残されている。

「某は、只今白川殿に仕えているものであるが、実は豊後竹田の産で青木猛彦と申す者でござる。先年、岡藩の小河弥右衛門（小河一敏）と、勤王の志士十人とで上京し、上國の志士と交遊していたが、小河等は藩命により呼び返された。余一人滞京して白川殿に仕えていたが、天下の大勢を察し、味方を得んがために帰つて来た。途中長州人にも会い、太宰府の三條公にも面謁しその内意を承けてきた。御地は宇佐八幡の鎮まします地であれば、大義を辨す

る士も多かるう。此処で同志を募り、尊皇攘夷の期を待ち、祖國の爲に尽くしたいと思う。どうか同志の糾合の勞をとつて貰いたい。尤も京都で当地出身の奥並継氏にも會し、その指図で当地に罷り越したわけである。ご存じの長三州も今は豊後光吉村に潜んでいるが、これとも話し合つてゐる。豊後でも同志数百人を得ているから、尊情の期を待ち、いつでも出兵しようとする約束は出来ている。右の次第、当分御当家への逗留を許して貰いたい。」と話し宇佐を活動の拠点とする。

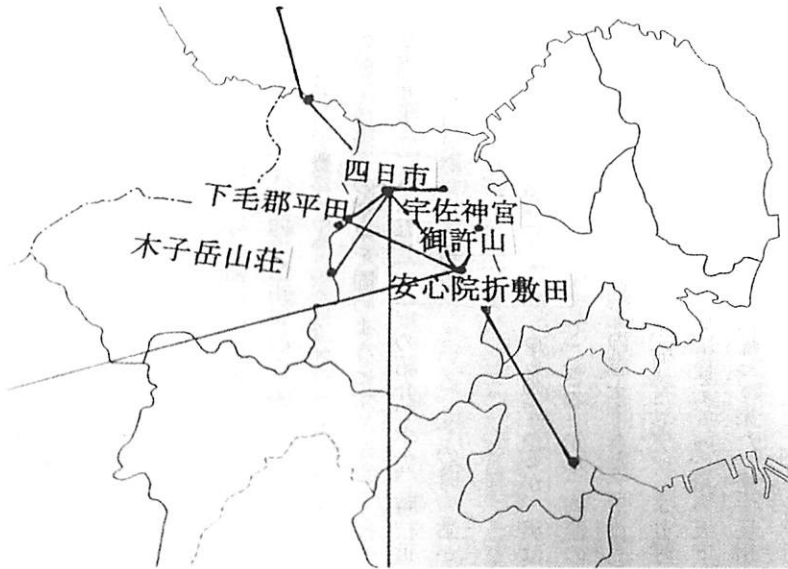
（明治四年、日田入獄手続書より「宇佐史談」）  
その後の猛比古の行動を紹介しよう。

○慶應元年（一八六五）五月六日、同志を得るた為肥前  
天草へ。

○同年五月二十五日、尊皇攘夷予備結社「楠公会」を結成。  
永岩出羽守岩根、石坂瑞枝、吉成勘解由敏夫が参加する。

○同年七月、太宰府にて三條実美に逢い蹶起の計画作りを依頼される。小銃彈薬は購入。資金は別府の煙草屋で調達。軍費は玖珠郡の船子にて調達する。

青木猛比古の行動を图示すると左図のようになる。



青木猛比古行動図

○慶應元年十二月、木子岳山荘（耶馬溪町跡田）にて拳  
兵計画を相談中露見、日田御代官所農兵部隊に追われ  
長州に逃亡。

・計画＝慶應二年七月五日蹶起 日田永山布政所を襲  
撃。日田代官窪田治部右衛門殺害。のち宇佐御許山  
に陣を構え豊後諸藩の勤王の志士を集め小倉陣營  
を脅かす計画。隊長 長三州。

○慶應二年（一八六六）七月、安心院重松邸にて謀議中、  
農兵の踏込みに合い掃討される。猛比古長州へ

・計画＝慶應二年九月四日市にて結党。十月日田代官  
所及び四日市分署襲撃、馬城峰にて蹶起。長州藩と  
力を合わせて攘夷倒幕を行う。

首領＝花山院家理（堂上家精華家出身尊攘派公卿）  
○慶應二年七月、安心院、重松七郎右衛門義胤宅にて集  
合（四日市党結成）再度計画作り。蹶起日九月十六日。  
七、八月再び農兵により離散。猛比古、長州奇兵隊・報  
国隊に参加。兵術を馬関（下関）にて操練。

○慶應二年七月二十七日 小倉城攻撃に参加。  
毛利長門守守勝（毛利慶勝養子・十四代藩主毛利定広）  
より感状を戴く。

去廿七日 小倉表之合戦 無 比類  
勦 感慨 不斜候 当座賞 脇差一腰  
令進之候

謹言

八月四日

長門守守勝

蹶起準備の爲、同志を長崎に派遣し武器彈藥の買入れを行わせる。また首領推戴の爲高橋・原田両氏を大阪に派遣する。

○慶應三年正月七日高橋・原田両氏大阪に着く。中津藩士の密告により大阪奉行所に捕縛され、豊後への護送中伊予灘にて入水自殺（一説に暗殺説）する。

○慶應三年（一八六七）正月、花山院家理首領推戴の爲京都へ（花山院家理はのち花山院隊として活躍）

○慶應三年三月、猛比古三條大橋に暗殺さる 三十七歳  
このようにして佐伯出身の勤王の志士、青木猛比古はその生涯を終えた。明治維新直前のことであつた。

終わりに青木猛比古が長三州、佐田秀、下村次郎等の仲間と計画した攘夷勤王浪士による蹶起がどうなつたかを記す。

○慶應三年 十月十五日 大政奉還  
○慶應三年十二月 九日 王政復古

○慶應三年十二月五日 日田御代官所天草陣屋襲撃

長州藩報国隊士、福岡脱藩浪士他二十数名で攻撃。軍資金八千両を強奪。四日市蹶起の爲の武器購入資金とする。

○慶應四年一月三日鳥羽伏見の戦い（一六日）

○慶應四年一月十五日 御許山騒動

佐田秀、長州兵平野四郎等十八人 宇佐長洲宇の島に上陸。四日市陣屋を攻撃。軍資金六千〜七千両を調達。浪士六十余名と御許山に立て籠もる。

（長州藩倒幕の後押しとして）

日田御代官所獄舎を攻撃、仲間を救出する。

花山院家理、三條実美より「帰京して王事に尽力せよ」との命を受け帰京。

長州藩山口格之助（四日市軍）、宇佐の福原隊と交渉。御許山蹶起の一人佐田秀（郡奉行）は「大政奉還が済んでいるのに焼き討ちをするか」として斬殺される。その他蹶起者の大半は長州藩奇兵隊脱退者に組みする者として処罰された。